

I 沿 革 概 要

I 沿革概要

明治11年、品川歩行新宿は北品川宿と連合、南品川宿は南品川獵師町、南品川利田新地、二日五日市の3ヶ村と連合、明治22年町村制施行と同時に6ヶ村を合併して品川町と称した。明治23年、下大崎村、上大崎村、居木橋村、桐ヶ谷村、白金猿町を合併して大崎村と称し、明治41年に大崎町と称した。

明治41年大井村は大井町に、大正15年に平塚村は平塚町となり、昭和2年7月1日に荏原町と改称した。此の間、明治22年東京市が誕生し、政治的、経済的に諸般の中樞をなす帝都として、東京市及其の近郊の町村は有機的つながりをもってきつつあった。

京浜間の要路に位する品川町、大崎町、大井町は工業の勃興するにつれて一部に工場地帯を形成し、大小工場が相次いで起り、いわゆる京浜工業地帯の一翼を形成するにいたった。かくて市域拡張による大東京建設の計画がすすめられたのは当然の事であって、昭和7年(1932年)10月1日東京市は隣接五郡の82町村を市域に併合し、旧15区の他、新たに20区を加えたのである。ここに荏原郡品川町、大崎町、大井町の地域をもって品川区を、荏原郡荏原町の地域をもって荏原区を編成した。

産業経済の発達と共に人口は年々増加の一途をたどり、昭和15年10月1日の国勢調査には人口419,403人を数えるにいたり、昭和18年10月1日に東京府と東京市が併合、東京都制が施行されたが、品川区、荏原区は従来通りである。しかし、昭和19年11月から20年8月15日の終戦に至るまでに被った戦争被害は人的、物的に関東大震災をはるかにしのぎ、東京都における死傷者、行方不明者計約22万人、罹災者約294万人、建物の損害約80万戸、罹災面積約4,200万坪に達し、品川区もその大半が戦火をうけて灰尽に帰してしまったのである。

戦後最初の昭和20年11月1日の人口調査には品川区、荏原区の人口が143,490人と減少し、一時絶望の深淵に投げられた都民は、やがてこの焦土の中から新しい真の民主文化国家建設をめざして立ち上がったのである。都の特別区施行のため、昭和22年3月、35区から22区に統合され(同年8月に板橋区から練馬区が分離独立して23区となった)、品川区と荏原区は合併されて新しい品川区が発足した。

このようにして品川区は稀有の災害から立ち直り、著しい復興を見せ、産業経済の発達と共に人口は年々増加の一途をたどり、昭和35年10月1日の国勢調査の人口は427,780人に激増し、戦前をしのぐ工業地帯を形成する工業地区として復活し、住宅地及び一大消費地帯として五反田駅周辺、大井町駅周辺、武蔵小山駅周辺に一大繁華街が形成された。

戦災復興と首都建設は更に品川を海岸に向かって発展させ、勝島町埋立地に大井競馬場を24年12月に開設、同年東京港修築工事計画として天王洲地先が埋立られ30年に完成した。更に現在建設中の品川埠頭も完成すれば2,3万屯級船舶の接岸が可能になる。又同埋立地には品川火力発電所が新

この様に都市化の進行と区内人口の増加にともない、各地区に児童会館を新設し、31年には大井町駅前に品川公会堂、品川文化会館を、34年には品川体育館、福祉センター等を相次いで建設した。加えて33年より着手された鮫浜入江の埋立は完成し、鮫洲総合グラウンドとして37年に竣工されるなど区民の福祉厚生施設等々が次々と新設されて、多くの区民に利用されている。品川区は正に東京都の表玄関として、ひいては日本の経済、文化の門戸として発展の一途をたどっているのである。

